


 巻頭言

行って、見て、触れることの大切さ —インドネシアを旅して—



山梨県総合理工学研究機構（兼 山梨県総合農業技術センター） 舟久保 太 一

2年前の11月と2月に、インドネシアのジョグジャカルタ特別州に20日間ほど赴いた。ジョグジャカルタ特別州と山梨県は友好協力関係を結んでおり、農業支援の目的でひとり現地に赴いたのである。主な目的はイチゴ栽培に関すること。病害虫が専門の私が選ばれた理由はよくわからないが、「私に何ができるのだろうか」と不安を抱えながら飛行機に乗り込んだ。

インドネシアは暑いというイメージがあり、ネットで調べても年平均29℃くらいで、年間の平均気温はあまり差がないとのこと。イチゴは一般的に25℃以上では花芽分化は阻害されると聞いていた。ということは、インドネシアでイチゴを栽培しても、あまり実が成らず、農業品目としては不適切ではないのかと思っていた。

ジョグジャカルタには富士山のような形のムラピ山という活火山がある。2010年に大きな噴火を起こし、火砕流や降灰により多くの死者を出すとともに、麓の農業は衰退した。この地域では農業を諦め採土業などで生計を立てている人が多いが、生活は豊かではない。そのため、イチゴを土地利用せずポリポットなどで栽培することにより、農業の再興を希望していた。そのことを地域の指導者から熱く語られ、その強い思いが心に響き、なんとか協力したいとしみじみ思った。しかし、気候的にイチゴ栽培は難しいだろうと思われ、代替品目はないのかと考えながら現地に赴いた。途中、車窓から外の景色を眺めていると、バナナ、パパイヤ、ドラゴンフルーツ等の果樹をよく目にした。南国だなあと思いながらどんどん登っていくと、日本で見慣れた野菜が目に飛び込んできた。ハクサイ、キャベツ、ブロッコリー等。ひとつやふたつの畑ではない。多くの畑で栽培されている。これら品目は冷涼性野菜である。インドネシアでお目にかかるとは思ってもみなかった。あわててエアコンの効いた車の窓を開けてみた。涼しいではないか。同乗している現地の人に聞いてみると、標高が1,000m以上あり、気温も18℃くらいまでは下がるという。

よくよく考えてみればあたりまえのことで、日本でも真夏に標高の高い高原に行くともとても涼しい。私の単なるイメージだけの先入観が見せていた虚像だったのである。実際に足を運び、自分の目で見てみないと真実は見えてこない。思い込みはダメである。この後、既に一部農家や州の農業局ではイチゴを試作していたことを知り、結実も目の当たりにした。品種はよくわからないが、四季成り性品種のようである。粒が小さい、形が悪い、

甘くない、着果数が少ない、病害虫が多い、休眠しない、品種が明確でない等問題は多いが、イチゴ栽培が普及する可能性はある。なお、ムラピ山麓は観光地でもある。観光イチゴ園などの需要はあると考えられた。ジョグジャカルタ州農業局の種苗センター（標高800m）で研究を行い、よい成果が得られたら、栽培マニュアルを作成し普及を行うこととなった。

さて、この旅で出会った病害虫を紹介しよう。イチゴでは炭そ病、うどんこ病、灰色カビ病等の病害が見られた。害虫は、葉を食害するイナゴのような昆虫（これがイネの葉も食害していると現地の人の談）やポットをひっくり返すとコガネムシの1種と思われる幼虫がたくさん確認された。また、スズメバチの1種と思われる蜂がイチゴ果実を食害していた。海の近くに行くとブドウが試作されていた。ブドウの葉が白くなるという相談を受けたので確認すると、べと病である。ある特定の品種の若葉に多発していた。この地域の最低温度は28℃くらいだそうで、このような高温地帯でもべと病が多発するのかと驚いた。しかしこれもよくよく考えてみれば、この時期は雨季のため雨がとても多い。雨の夜は肌寒く感じられることもあった。ここのブドウは休眠しないなど日本とは全く違う環境で栽培されているため、日本の常識で考えていいものか。そもそもこの菌の同定もちゃんとしていないので、議論はできないのだが。

今回の旅で、先入観を捨て少しでも透明感のある目で見ることの大切さを感じた。実際に行って、見て、触れないとわからないことも多い。あたりまえのようなことだが、意外に難しい。

今年9月に、州農業局は政府の支援を受けながらいくつかの農業グループにイチゴ苗1,500株を配布したという。事業は着実に進んでいるようである。

この旅で、ヒンドゥー教および仏教寺院群のプランバナン遺跡、仏教寺院であるボロブドゥール遺跡の両世界遺産を拝見した。壮観であった。この国の多くはイスラム教徒なので、毎日5回アザーン（礼拝への呼びかけ）が流れる。宿泊したホテルの横にはキリスト教系スクールがあった。高等学校までの世界史ではこの国のことは全く学んでこなかったが、いろいろな勢力、文化、宗教に翻弄された歴史を持つようである。これらの異なった文化が混在するこの国の複雑さも目の当たりにしたような気がした。行って見て感じたことである。世界は広い。

（関東東山病害虫研究会 会長）